



図Ⅱ-3. 挑戦的課題達成型体育授業による心理的変数の変化

用いて分析を行った結果、主観的恩恵はポジティブな徳性へ直接効果もあるが、気づきを介しポジティブな徳性への間接効果もみられた。最終的には、図Ⅱ-3に示すように、体育的ポジティブな徳性と一般的ポジティブな徳性の相関が極めて高かったことから、大学体育によるポジティブな徳性の向上効果の仮説的拡大モデルを構築した。今後このモデルは、ポジティブな徳性の汎化を考慮に入れ、さらにモデルの検証を行う必要がある。

(本研究は熊本学園大学総合科学26巻1号に掲載)

Ⅲ. 「運動」としての大学体育必修化への回帰の具体的提言

橋本 公雄

大学体育連合（大体連・地方の体育連合）は、大学体育の必修化への回帰に向けたさまざまな試みを収集し、その情報を全九州の大学・短大に配信し、大学体育の必修化への回帰運動を起こす必要がある。加えて、大学スポーツの振興への貢献的活動を行うことによって、学内における体育教員の市民権をさらに高め、確立していく必要があり、下記の提案を行った。

1. 各大学での大学体育授業研究の促進

学内に一般教育としての大学体育の教育方針（目的）を周知するために、授業研究の促進を図ることは重要なことである。研究課題は、できるだけ一般教育の理念や目標、私立大学の建学の精神などに準拠したものがよい。また、実践的授業研究の論文や研究資料は、各大学で刊行される紀要論文のほうが学内の先生方に読んで頂ける可能性が大きいのでよいだろう。

これに関連して、大体連、九体連が取組むべき事項として、以下のことを提案した。

- 1) 大学体育の必修・選択と連合への加盟の関係を調べること。
- 2) 「この論文・データで必修化を説得できた」という論文や資料を収集すること。

3) 必修として残っている大学、あるいは再必修化された大学（西南学院大学や東海大学など）の情報を収集し、理由を分析すること。

4) 大学体育必修化へ向けての戦略会議（仮称）を九体連の春期研修会で開催すること。

2. 学内における「運動・スポーツ文化の醸成」への大学貢献

大学体育の授業研究を促進し、体育授業による自己成長効果のエビデンスを蓄積するとともに、学生のキャンパスライフの充実と大学の活性化のために、体育教員は「運動・スポーツ文化の興隆」に尽力し、大学に貢献する必要がある。

そこで、すでに試みられているいくつかの大学の事例を紹介する。

- 1) 運動・スポーツ活動がキャンパスライフをエンジョイさせることは、日本学術会議の21世紀の提言の中で謳われているので、ぜひ読んでもらいたい。
- 2) 大学体育授業で学生が好意的態度形成できても、一般学生は授業外で実施するところがない。課外活動では、運動部活動で独占して使用している運動施設と場所の開放や活動時間の確保（昼休み、業間、放課後）を行う必要がある。

<九州大学の事例>

4時限目終了後1時間は一般学生に運動施設を開放（半世紀継続）している。

- 3) 運動・スポーツ活動の活性化

運動・スポーツを活性化するため、運動部と協力してスポーツ推進委員会（仮称）を設置し、検討する。

<熊本学園大学の事例>

スポーツ・デー委員会（学生、教員で組織）が学内規定で設置されている（現在、休眠中）。

これからの大学づくりに必要なこととして、スポーツの力を活用することを執行部に語り、「スポーツ・文化拠点大学づくり構想」を大学の方針として位置づけさせた。この影響もあり、令和6年度からは、「体育施設管理センター」が「スポーツ振興センター」として発展的に改組され、大学スポーツの強化はもとより、一般学生のスポーツ活動の促進と健康づくり、学修支援などを統括するセンターとして出発することになった。小さな大学はこういう主張が実現化する可能性もある。この一環として、学長杯争奪リレーマラソン大会（グラウンドの周回）を開催した（4回開催、現在はコロナ禍で中止中）。

将来的には、九州地区大学体育協議会（九州インカレ）とも連携し、全大学でリレーマラソン大会を開催し、各大学代表チームによる大学間リレーマラソン大会を開催（各大学1チーム参加）すると、九州インカレも活性化するだろう。

<福岡大学の事例>

福岡大学スポーツ科学部では、ASASPO 倶楽部を設置し、毎週土曜日に一般学生が運動・スポーツへ参加する場の提供を行っている。スポーツイベントを開催し、教職員も参加し、年々拡大している。

3. 九州体育・スポーツ学会の専門分科会としての大学体育授業研究専門分科会（仮称）の設置

将来的には、九体連主導で「第6専門分科会」として、大学体育授業研究専門分科会（仮称）の設置を目指す。詳細は、体育・スポーツ教育研究22巻第1号に掲載されているので、参照していただきたい。

文 献

- Baron, R.M. & Kenny D.A. (1986) The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51 (6): 1173-1182.
- Doran, G.T. (1981) There's a S.M.A.R.T. way to write management's goals and objectives. *Management Review*, 70 (11): 35-36.
- 橋本公雄 (2021) 第7章3節 体育授業版ポジティブな徳性と測定尺度の開発. 橋本公雄・西田順一・木内敦詞・堤義彦 著 (2021) 自己成長をはかる大学体育——挑戦的課題達成型体育授業の理論と実践——. 花書院.
- 佐久間智央・高橋正則・水落文夫・磯貝浩久 (2017) ソフトテニスにおける自己効力感尺度および他者効力感尺度の開発—スキルと心理的パフォーマンスに着目して—. *コーチング学研究*, 30 (2): 135-148.
- 西田順一・橋本公雄・木内敦詞・堤俊彦・山本浩二・谷本英彰 (2016) 体育授業における大学生の主観的恩恵評価およびその大学適応感に及ぼす影響性. *体育学研究*, 61: 537-554.
- 島井哲 (2012) ポジティブイン理学入門——幸せを呼ぶ生き方. 星和書店.
- 山崎将幸 (2021) 7章2節 体育授業の気づきと測定尺度の開発. 橋本公雄・ほか 著 (2021) 前掲書, 花書院.